

---

# **東京魔学院～運び込まれた伝説の宝～**

カルパッチョ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東京魔学院へ運び込まれた伝説の宝

### 【Zコード】

Z8628D

### 【作者名】

カルパツチヨ

### 【あらすじ】

精霊騒動と呼ばれる一件の事件から数週間が過ぎた東京魔学院でまた新たな問題が発生する。突如学院の視察目的と称し学院を調査する教団の幹部達。何事も無く終わるかと思えた視察途中に一つの事件が発生する。教団が執拗に求める学院に運び込まれた物とは一体なんなのか。公安部の生徒達は学院長と協力しその謎を追うことになる・

## 一話「荷物」

一話「荷物」

「本来のルートからはかなり離れているな・・・」

深い森の中を数人の男達が周囲を警戒しながら歩いていた。中央の男は小箱を握り締めていた。その小箱を守りきるのが彼らの仕事らしい。先頭を歩いていた男が足を止めた。

「困まれたか・・・」

その言葉に全員が足を止める。一番後ろにいる男が現在位置を特定する。

「ここからなら学院が一番近い」

「あそこに逃げ込むのか?」

「アカツキ、あそこなら教団も容易に手を出せん」

アカツキと呼ばれた男はおなも躊躇していた。だがその間に敵との距離は縮まる。アカツキを含め男達は学院・・東京魔学院に逃げ込むことを決意した。現状ではそれが最善の策とも言えた。

「俺はあいつらを足止めする」

「・・頼む」

アカツキはその場にたつた一人残つた。そして迫り来る敵を迎撃する。アカツキにとつてはかつて同胞であつた者達を。だが躊躇はしなかつた。過去は過去。一番大事なのは現在だ。今敵である者達に情けをかけるつもりはない。

「俺達を追つてきたことを後悔することだな・・ヘレン!」

そのころ東京魔学院では午前の授業が終わり、昼食の時間となっていた。生徒会公安部の部屋にはいつものメンバーが集まっていた。

「最近学院内で特に変わったことなんてないよ

「公安部廃止の案もあるんだろう? 輝彦」

「噂ではな。・・生徒会の役員会議には俺は出ないからな・・」

東京魔学院公安部。生徒会の特別メンバーとも言つべき彼らの役割は学院内の秩序を保つ事。簡単に言えば喧嘩を止めたりすることだ。後は不審物の処理など。しかし、最近は学院内でそういう騒動が起きること自体が珍しくなつており、生徒会の正規メンバーは大半は公安部の廃止を求めているらしい。完全廃止は無くても規模縮小程序度は公安部部長滝川輝彦も覚悟はしていた。だがその隣に座る公安部副部長の肩書きを持つ坂本信雄は反対していた。

「この前の騒ぎだつて俺達がいなけりや、あの精靈は死んでたぜ?」

「だがあの騒ぎを公表するわけにもいかないし・・・

「・・というより、何で俺が副部長なんだよ」

実は最近まで副部長は別の人物であった。成瀬達彦という生徒が副部長を務めていた。だが、達彦は突然自主退学したのだ。公安部の誰にも、もつと言えば友人の誰にも理由を告げずに。そこで公安部メンバーで誰がいいかを多数決で決めた所信雄になつてしまつた。

「そういえば、彼女は元気なのか?カズキ」

「元気ですよ、相変わらず」

カズキという一年生の生徒はリンという精靈と契約している。少し前の騒動までは精靈を嫌っていたカズキだが、いろいろとありその後はリンと仲直りしている。その騒動の事を公表できれば公安部廃止など言わなくなるだろうが、公表できなければあつた。それはその騒動にとある組織が関わっているからだ。歐州魔法教団。教団と呼ばれる組織である。かつては国際魔法機関の一部であつたが国際魔法機関のやり方を批判し独立した組織だ。東京魔学院は教団系の学校である。だが、公安部が関わった騒動の際に教団はファントムと呼ばれる兵器を投入し学院を襲撃した。学院長はこの一件に対し全員に外には洩らさないようにと言つた。そんなことをすれ

ば大混乱が起きるからだ。

『大変です、カズキ様』

「リン？」

カズキはいつも穏やかな性格自分の契約精霊がかなり焦つていることに驚きながら、何があつたかを尋ねた。

『教団の人達が・・学院の近くに』

「教団の人間が？」

『はい。この学院に何か運び込まれたはずだつて・・』

リンは姿を消して学院内をうろうろしていたのだろう。そこで偶然教員と教団の人間の会話を聞いたようだ。教団の人間はかなり荒々しく教員に尋ねていたらしい。ここに何かが運び込まれたはずだと。

「この前みたいにならないといいが・・」

そのころ、学院から出て行こうとしていた教団の幹部達は立ち止まり振り返った。

「なんとしても・・あれは奪わねばならない。まだ、ヘレンの部隊とは連絡がつかんのか？」

「どうも精霊殺しと交戦したようで・・最悪の場合もうすでに死んでいるという可能性も・・」

教団の幹部は舌打ちした。

「視察目的と告げれば連中も学院内の調査を断れないだろう・・学院を巡る新たな戦いがまた始まろうとしていた・・」

## 一話「視察」

「まずは皆に言つておきたいことがある。今日から七日間、教団の騎士による授業視察がある」カズキはその言葉に驚く。教団系統の学校ではよく行われていることらしい。だが、あんなことがあつた後での視察だ。ただの授業視察ではないだろう。

「廊下で騎士に会つこともあるだろ？が、失礼の無いようにな」

そう言つ担任の顔はかなり険しかつた。明らかに視察を不愉快だと感じている証拠だ。あのファンタムでの襲撃は生徒には知られていないが教員は全員が事実を知っている。一時間目の授業中カズキは姿を消して傍にいるリンに尋ねた。

「教団の騎士には会つたのか？」

『一人だけなら・・・。旧校舎の入り口にいましたけどやつぱりな・・・』

旧校舎は今は使われていない建物だ。授業の視察ならあそこに行く必要はない。やはり別の目的があるのだ。リンが昨日聞いた会話と関係があるのだろう。この学院に運び込まれた何か。それを教団は探している。

(一体・何なんだ?)

その日の放課後、カズキは生徒会室に向かう途中一人の男に呼び止められた。

「君、生徒会の人間かね？」

「いえ、違います。生徒会に用事があるだけですが

「そうか。この学院には公安部というものが存在するようだが・・どこに行けば会えるか知らんかね？」

カズキは知りませんとだけ答えた。男はそうかと言つて反対方向へと歩いていく。教団の騎士だ。それはすぐに理解できた。問題は何故公安部を探しているかだ。カズキは公安部の部室に入ると先ほどのことを輝彦達に話した。

「前の事が絡んでいるんだろうな・・」

「敵視されているってわけか？」

「多分な・・面倒だが」

輝彦達はため息をついた。輝彦達は自分の命を守るために教団の送り込んできたファントムと戦つただけである。だが、教団の人間からすればそれは教団に逆らっていると解釈できるのだろう。かなり迷惑な話だ。

「そういうえば・・学院の近くの森で戦闘の跡らしき物が見つかったらしいな」

「森の中で？」

信雄が頷く。信雄が聞いた話では、ファントムの残骸も確認されているらしい。教団関係者の見解は教団に対して反感を抱いている人物がやつしたことらしいが。

「反感ね・・。それで具体的に人物名とかは？」

「学院長とあの人人の名前があがつてた」

「！？」

輝彦達は全員が驚いた。学院長、本名は高坂昌吾。かなり教団よりの考え方の持ち主だ。そしてあの人というのは三好武彦という人物だつた。カズキとリンの騒動では学院長である昌吾と知り合いという理由で協力してくれた人物だ。教団、国際魔法

機関の両方から危険人物とみなされているという噂を耳にしたことはある。精靈殺しと言われるアカツキですら勝てないほどの腕の持ち主だ。

「武彦さんは数年前からいろいろとやつてゐるからまだ分かるけど・・学院長は・・」

「偽装なんだよ、あいつの場合は、」

誰もがその声に振り返る。公安部部室の扉の前にいるはずの無い人物がそこにいた。三好武彦だ。

「・・どうしてここに」

「視察中学院の護衛を頼まれてな。ま、アカツキ達だけで十分とは思うがね・・」

武彦は笑いながら言つた。アカツキは前回の騒動で学院を襲撃する作戦の事を知った時に教団を抜け、武彦の部下となつた人物だ。

「ここに来たのは忠告しにきたのや。・・あんまり今回のことには関わらない方が良いぞ」

その方が身のためだと武彦は言つた。真剣な表情で。輝彦達は何が起こつているのかを尋ねたが当然武彦は答えない。

「視察期間は出来る限りおとなしくしどけ」

それだけを告げると武彦は部屋から出て行く。本当に忠告だけしに来たようだ。武彦の真剣さから推測するに今回は相当危ないようだ。この前の中かなり危なかつたがそれ以上なのだろう。

「俺達から巻き込まれに行くつもりはないけどな」「巻き込まれないことを祈るしかないか」

そのころ武彦は廊下を歩いていた。教員が着ている服を借りて、目深に帽子を被つてるので教団の騎士とすれ違つたが、気づかれはしなかつた。

『巻き込まれないといいがな・・』

「教団は彼らを敵視しているかもしかんが・・理由もなしに拘束は出来ん」

だが教団の幹部達は何か理由を作ろうとするだろう。だが一番危ないのは輝彦達より昌吾かもしない。昌吾はこれまで教団支持の立場を維持してきた。それを偽装であると知るのは武彦のようないい。ごく一部の人間だけだ。しかし、そろそろ教団も気づく頃だろう。

「昌吾が拘束され、連行されればここでの維持も難しくなるからな」

『・・では俺は学院長室を張つておくことにしよう』  
武彦は相棒である、デュフォンに頼むと言った。

「さて・・俺もいろいろと準備をしないとな」  
学院を教団から守るための武彦達の作戦が始まつとしていた・・

## 二話「事件」

### 二話「事件」

それは教団の騎士による視察の三日目に起つた。学院の旧校舎の入り口付近で騎士一人が殺されていた。学院長は旧校舎付近には立ち入る必要はないはずと言い切つてこの事件については何の捜査の必要も無いと言つた。しかし教団側は旧校舎に何かあるのではないかと旧校舎への立ち入り捜査を求めた。

「必要ありません。今回の視察の目的はあくまで授業がどのようなものかを見るためのもの。現在使われていない校舎をあなた達に見せる必要などないはずですが」

学院長の言葉に騎士達は黙る。学院長は視察の中止を訴えた。旧校舎付近をうろついたりするなど、本来の目的とは違つてゐるからだ。学院長を含め教員が視察を認めたのはあくまで授業内容についてのみ。旧校舎の視察など教団は言つていらないし、認めてもらひない。

「・・お前達の判断はいずれ後悔を生む事になるぞ」「またあの時のようにここを襲撃ですか・・。憲りないものですね。貴方達も」

「貴様・・」

「拘束しても構いませんよ。あの事を公表できるのなら」学院長は笑つた。出来るはずもない。あんなことが知れ渡つてしまえば、教団の立場はますます危なくなる。騎士達が去つた後、学院長室に武彦はやつてきた。

「そろそろ本性を出す時か?」

「かもしませんね」

「アカツキ達を追撃していたのはヘレンという教団の幹部だ」武彦は一枚の写真を見せる。そこには一人の女が写つて

いた。銀髪の女が、教団の幹部で、裏切ったアカツキの後任としてここにやつて來た。武彦はアカツキからの報告後、いろいろとこの人物について調べた。分かった事は二つ。アカツキと同じ部隊にかつて所属していた事とヨーロッパでは狩人と言われるほどの術の使い手らしい。ただ、今までヨーロッパで教団施設の防衛の任務についていたらしく、他の地域ではあまり知られていない。

「これからどうするのです？」

「教団はすぐにでも部隊を編成して来るだろうな。今の内に生徒を家に帰したほうがいいんじゃないかな？」

「学院の周囲に結界を張ります。その外で戦えば大丈夫です」  
武彦は地図を取り出した。学院の周辺の地図だ。学院は四方を森に囲まれている。この森は学院長である昌吾が魔力で生み出したものだ。生徒や教員以外の部外者にはかなり分かりにくい地形となっている。鬱蒼とした森なのでかなり視界が悪い。武彦は学院の右に広がる森を指さした。

「一番分かりやすい入り口はここだ。多分今回の視察の時もここから出入りしているはず」

「ではそこに重点的に戦力を置く・・と」

「ここにアカツキと日下部の部隊を置く」

「後はまばらに戦力を置けば問題ないはずだと武彦は考えていた。他のルートからの場合教団の騎士達が迷い学院まで到着しないという可能性もある。」

「お前は公安部の連中と一緒に謎解きでもやつてる」

「・・そうですね。それが一番いいかもせんね」

昌吾はすぐに公安部の部屋へと向かう事にした。武彦はアカツキ達と合流するために森を目指し歩き始めた。

そのころ公安部の部室では情報整理が行われていた。

「旧校舎で騎士の死体が発見された・・か」

「あの校舎って数年前から使われてないだろう？」

何故そんな場所を見る必要があつたのか。それが分からないのだ。あの場所に騎士達が探している何かがあるというのだろうか。だがこれ以上調べればそれは自分達から巻き込まれに行くようなものだ。

「・・輝彦、お前はどうするんだ？」

「生徒会からも教員からも要請は無いんだ。これ以上関わることはないと思う」

輝彦はそう述べた。それが一般的な考え方だ。生徒会は今回の件は生徒が関わるべき問題ではないとしているし、教員達もすでに解決済みと言っている。どこも公安部に依頼はしていないし、今回の件については公安部が関わるべき問題ではないということは輝彦達も理解はしている。

「では、依頼があれば手伝つてもうえるといつ解釈でよろしいですか？」

「え？」

全員が扉の方を向く。そこには昌吾が立っていた。呆然とする輝彦達を見て、昌吾は公安部に依頼をはじめた。

「旧校舎に運び込まれたという荷物が本當にあるのかどうか調べて欲しいのです。もちろん調査には私も付き添いますし」

危険はないはずだと昌吾は述べた。旧校舎の周囲には結界が張られており、教員以外は入れないので教団と激突することもないだろう。

「では、明日から数日の間公安部のメンバー数人は授業を受けずに、旧校舎の探索を行つてもらいます」

この旧校舎の探索が思わぬ結果を生むことになろうとはまだ誰も想像もしていなかつた・・

## 四話「旧校舎」

### 四話「旧校舎」

この日、輝彦、カズキ、リン、信雄の四人は旧校舎に来ていた。昌吾が待つ旧校舎の入り口に四人は到着した。

「では、行きましょうか」

昌吾を含めた五人は旧校舎の中に入していく。この校舎は数年前までは実技教室として使われていたらしい。魔法の実技試験などの時に使われていた建物だ。噂では試験の際、暴走事故が起きて数人の生徒が亡くなってしまった、それから使われなくなつたらしい。

「しかし・・かなり不気味な雰囲気ですね」

暗い廊下に、ずっと使われていないからか埃がかなりある。昌吾は懐中電灯を手にしていた。電気がつくれないからだ。彼ら五人が目指すのは旧校舎の地下。騎士達がいう何かが隠されているとすれば、そこが一番可能性があるという。ただでさえ、ここは無人の施設だがたまに教員が入ることがあるらしい。だが入つたとしても地下までは行かない。だから何かがあるとすれば誰も見に行かない地下があやしいのだ。

「地下に続く階段は一つしかありません。そこに最近人が通つた跡があれば・・地下には何かがあると断定しても良いでしょう」

教員であつてもこの旧校舎には学院長である昌吾の許可を得てから入らないといけない。そして、旧校舎の見回り以外に教員が入ろうとした記録はここが使われなくなつてから一度もない。旧校舎の見回りは地上部分しかないことになっているので、地下に続く階段には足跡

など残つていなければ。先頭を進む昌吾が足を止めた。

「・・この階段ですね」

「人が通つた跡なんて無さそうですが・・・」

階段は廊下同様埃まみれだつた。こんなに埃がついているなら人が通ると、靴の跡程度残りそうだ。だがそんなものは見当たらない。しかし、カズキは階段の真ん中を見ていた。そこに何かが落ちてある。

「・・これは・・・」

「ペットボトル・・・?」

カズキはそれを拾い上げる。製造年月からしてつい最近のものようだ。

「・・どうやらここを誰かが通つたのは間違いないみたいですね」

昌吾達は一步ずつゆっくりと下へと降りていく。この旧校舎が建てられたのは昌吾が学院長になる前のことらしい。だから昌吾もこの校舎の全てを把握しているわけではない。特にこの校舎の地下にはいろいろと謎の部屋があり、まだここが使われていた時も地下に入りたがる者は少なかつた。何のために校舎に地下室など作つたのかは謎だが、強大な魔力で校舎自体が覆われているために解体工事も出来ないのが現状らしい。一説では何かを守るために作られたのだと聞くがそれも本当かどうかは分からぬ。

『強い魔力を感じます・・・』

リンの言葉に全員が足を止める。カズキ達は臨戦態勢をとつた。何か不穏な空気を感じたのだ。そしてそれはあつた。カズキ達の所にナイフが投げられる。尋常じゃない魔力が彼らの目の前から溢れ出ている。懐中電灯で照らしても人がいる気配はない。だが何かがそこにいる。

「なんだ、この不気味な感覚は・・・」

「・・前に進むのです、君達は」

昌吾が呟いた。前に進めと。カズキ達は昌吾の方を向いて何かを聞こうとする。だがそれを遮るかのようにまたナイフが飛んできた。

「私がここで彼を足止めします。君達はその隙に奥へ」

「戻るっていう選択肢は・・」

「もう上へ続く階段はありませんよ」

昌吾の言葉は嘘ではなかつた。昌吾達が降りてきた階段が消えている。まるで最初からそこには何もなかつたかのように。昌吾は繰り返した。先に進めと。戻る事も出来ない今はそうするしかないと。カズキ達は少し躊躇したが躊躇いを振り払い、進む。ナイフが飛んでくるかと思っていたがそれはなかつた。ただ遠くで刃と刃がぶつかり合うような音がしているだけだ。そして何歩いたかも分からずにつだ前に進んでいた彼らの前に一つの扉が現れた。

「まるでここに入れって言つてるみたいだな」

「学院長は何かを知つているような感じだつたし・・

「だけど・・進むしかない」

もう戻る事は出来ないのだ。カズキ達は躊躇いを振り払い扉を開けることにした。その先に何が待っているかも知らずに・・

## 五話「旧校舎の地下に眠る者」

五話「旧校舎の地下に眠る者」

「なんだよ・・これは・・」

旧校舎の地下への入り口と思われる扉を開けるとそこには鎖に繋がれた一人の男がいた。男の顔には何の表情もなかつた。だが驚くべきはその男の足元に散らばる無数の血痕であつた。まるでここで惨劇があつたかのようだ。

「妙だな・・これだけ血痕があるのに血の匂いが全くしないなんて・・」

輝彦の言葉に信雄達も同意する。確かに全く血の匂いがしない。信雄は鎖に繋がれている男に近づいた。

「死んでる・・のか」

「いや・・多分気を失っているだけだろう」

「どうしてこんな所に人が・・」

鎖はとても頑丈そうだった。とても一人や一人で外せそうなものではない。この男が何者であれ、これだけ頑丈そうな鎖に繋がれているということは相当危ない人物なのだろうか。例えそうだとしてもどうしてこんな所に幽閉されているのだろうか。

『違います・・この人・・人間じゃないです』

「リン?」

リンは怯えていた。鎖に繋がれ、気を失っている男に。身動き一つ取れないはずの相手に怯えていた。

ほう・・俺が誰だか分かるのか?若き精霊よ

「!?」

この場にいる誰の者でもない声が聞える。カズキ達は辺りを見渡したが、自分達以外は誰もいない。可能性

があるとすれば目の前の男だが、それはありえない。

「誰だ？」

俺は今は意識だけの存在でな、目の前に俺の体があるだろう？

声が答える。カズキ達は驚いた。声は言うなれば幽霊のようなものであつた。実体を失つた意識体。死んだわけでもないが、外部からの力で意識だけが放り出された状態。

お前達が何のためにここを訪れたかは知らんが、早々に立ち去る事を勧めよう。でなければ死ぬぞ

「どういうことだ？」

『・・・カズキ様・・・この声の主は精霊なんです』

カズキがリンの方を向く。リンもよく知つている精霊だった。かつては精霊界を統一する四人の精霊の一人として数えられていた精霊、デュバル。精霊戦争を引き起こした張本人もある。声が笑う。

やはり・・・そうか。お前はあの忌まわしいスザクの娘か

『貴方は父と共に死んだはず・・・どうしてこんな所に・・・スザクも生きているぞ。ここにはいないがな

リンの動きが止まる。スザクは生きている。その言葉に反応したのだろう。だが、リンの知つてているデュバルはこんなことは言わない。デュバルは自らが生きるために誰であろうと犠牲にするような者だ。まして人を助けたりなどしない。

「あんたは・・・精霊を率いて人間を襲つたんだろう?」

・・精霊戦争・・・私はあの戦争には関与していない

『え?』

リンが戸惑う。輝彦も耳を疑つた。精霊戦争の原因となつたのは精霊界の中心でもあつた四人の精霊の

内一人。その精靈の名前までは知らなかつたがそれは間違いないはずだ。

精靈戦争の間も私はここにいた

『そんな・・・じゃあ・・父は・・』

・・若き精靈・・そして人間達よ。私の言葉は信じれぬとは思つが・・一つだけ言つておく。教団の目的はこの世界の崩壊だ

デュバルの言葉に誰もが動搖した。何が真実なのかはもうすでに分からなくなつていて。デュバルの声はそれ以上聞えることはなく、誰もが呆然としていた。だがそこへ頭上から爆発音が轟く。何があつたのだろうか。動搖する四人に再びデュバルが語りかける。来た道を戻れ。・・上にいた者が包囲されている

「学院長が？」

急げ。今、動けるのはお前たちしかいない

「教団の連中か！」

カズキ達はすぐに昌吾を助けるために走つていく。そのころ、昌吾は複数のファンタムに囲まれていた。どうやら旧校舎に入つていく前から尾行されていたようだ。

「タイミングを見計らつていたというわけですか・・

昌吾はどこからか槍を取り出し、それを握り締めた。「残念ですが・・簡単に捕まるつもりはないのでね」

一斉に飛び掛るファンタム達。だが、ファンタムは一瞬で全て破壊される。昌吾は槍を構え周囲を見た。これで終わりではないはずだ。それにファンタムだけではないだろう。どこか近くに教団の騎士もいるはずだ。

「近くにいるのは分かつています。出て来てはどうです？それとも・・卑怯な手でしか勝てませんか。負け犬の

あなたは「

昌吾が苦笑する。その言葉にいろいろしたのか、物陰から一人の騎士が姿を見せた。騎士の後方にはファンтомが数体待機している。

「抵抗を止める。そうすれば命だけは助けてやる」

「まるで自分が強いかのような台詞ですね。私達三人の中では最も弱かった、君が」

昌吾の言葉に騎士は苛立ちを隠せず、ファンтомに攻撃命令を出した。だが、すぐにファンтомは残骸となってしまう。騎士は動搖していた。昌吾はその動搖から生まれる隙について、攻撃する。

「少しは強くなつたようですね・・君も」

「その喋り方・・止めればどうだ?疲れるだろ!」

昌吾の槍が騎士を襲う。騎士はその攻撃を回避するだけで精一杯で、剣を抜けずにいた。

「裏切り者にはここで死んでもらひ」

今までの言葉遣いとは全く正反対の言葉を昌吾は使っていた。いや、きっとこれが昌吾の素なのである!。

「教団に味方した」を呪え・・片瀬博之!」

昌吾は過去を断ち切るべく、槍を振っていた・・

## 六話「拘束」

六話「拘束」

「学院長！」

輝彦達の声に昌吾は驚く。騎士はその隙を見逃さなかつた。剣を抜き、昌吾に襲い掛かる。昌吾はとつわに身構え、攻撃を受け止める。

「この学院の生徒のようだな」

「彼らは無関係だつ、片瀬！」

昌吾が切り返す。そして、輝彦達の前に立つた。片瀬と呼ばれた騎士は剣を握り締め、昌吾に斬りかかる。「守りながら戦うのは厳しいだろ？、高坂っ」

「守るものがないよりはましだ、裏切り者のお前よりは！」  
片瀬の劍と昌吾の槍がぶつかる。今まで見たことない昌吾の姿と、聞いた事のない口調に輝彦達は戸惑つ。だが、噂どおり昌吾は強かつた。片瀬の方がかなり押されている。輝彦達を守る分、昌吾は不利になるかと思つていた片瀬であつたが、昌吾の強さは変わらない。それどころか、攻撃のスピードが上がつている。昌吾が守りに転じたのは一瞬。態勢を立て直すとすぐに攻めに転じた。

「・・そろそろ時間か」

「逃げれると思うな、片瀬！」

「逃げる？逃げるはずがないだろ？。もう少しで味方が到着するのだからなつ」

片瀬の言葉に呼応するかのように、旧校舎の壁が崩れ去り、そこから数人の騎士が乱入して來た。ファンタムも数体いる。すぐに昌吾達は包囲されてしまつ。カズキ達も臨戦態勢をとる。だが、昌吾がそれを制止する。

「・・隙を作る。その間に離脱を

「しかし・・」

「教団の雑兵相手に遅れを取るつもりはない」

昌吾は槍を上空へと掲げた。そして、一気に振り下ろす。床が割れていき、それが騎士達を巻き込んでいく。致命傷は与えられないだろうが隙は作れる。輝彦達はその隙に騎士達の真横を通り過ぎ、旧校舎からの離脱をはじめると。だが、片瀬は昌吾の攻撃を回避していた。

「片瀬！お前の相手はここの俺だ！」

「つ・・ちつ・・」

片瀬が昌吾の攻撃を剣で受け止める。輝彦達は無事旧校舎を離脱する。だが、それと同時に騎士達が起き上がり昌吾が包囲される。

「敗北を認めろ、高坂。今ならまだ間に合う」

「敗北？ 傷一つつけれない者が言つ台詞ではないだろう」

「命だけは助けてやるぞ」

昌吾は答える代わりに一人の騎士に槍を突き刺した。そして片瀬の方を睨み、言つ。

「これが答えただ、片瀬！」

そのころ、輝彦達はまだ学院の近くにいるはずの武彦を探していた。あの人であれば助ける。そんな気がしたからだ。カズキは途中、アカツキを見つける。輝彦達はアカツキに事情を説明し、武彦がどこにいるかを尋ねた。それに答えたのはアカツキではなく、日下部であつた。

「アカツキ、ここに指揮は任せた。俺はこいつらを連れてあの人所へ行く」

「ああ、任せておけ」

学院は教団の攻撃を受けているようだ。ファンタムの部隊が学院を包囲し、少しずつ前進してきていたらしい。

武彦は学院の外の森の中で指揮をとっているらしい。

日下部修一は輝彦達について来いといつて歩き始める。

そして、数分後輝彦達は武彦の所にたどり着いた。日下部は急いで事情を武彦に説明する。

「日下部、お前は持ち場に戻れ。仙波、ルイ、二二の事は任せた」

武彦の傍にいたルイと仙波の一人が頷く。武彦は呪文を唱え始めた。武彦の足元に魔法陣が浮かび上がる。

「二二を動くなよ、お前達は」

最後に四人に忠告し、武彦は消えた。いや、消えたのではなく移動した。瞬間に別の場所に移動する魔法。転移魔法である。高度な技術を必要とするため、並みの人間では扱えない。

「そろそろ限界だろう、高坂」

「・・そんなことはない」

高坂の指示で昌吾の周囲にいたファンタムが一斉に飛びかかるとした。だが、ファンタムは瞬時に碎け散り残骸が転がった。突然の事に高坂は動揺を隠せなかつた。

「・・偉くなつたものだな、片瀬」

煙の中から立ち上がった人物に騎士達がざわめく。後退りをする者までいた。

「丁度良い・・お前も高坂と共に拘束してやる。そつすれば教団に逆らう連中は消える」

「おもしろい冗談だな、片瀬」

ファンタムの残骸が突如片瀬を襲う。片瀬は残骸を回避できず、傷を負う。騎士達が片瀬をかばうために前に出るが残骸が彼らを襲う。剣で残骸を振り下ろしたのは良いが、武彦の攻撃を受け、倒れる。

「・・つまらないな。肩慣らしにもならん」

武彦は一瞬で片瀬の前に立つ。ファンタムも全て残骸となつて

いるし、部下も全員やられた。もはや、片瀬が勝つ術はない。だが、今更命乞いをした所で無意味なのは片瀬自身がよく知っていた。武彦は敵に情けをかけるような者ではない。殺すなら一瞬でだ。

「終わりだ」

武彦の刀が片瀬の胸を貫いた。だがそれが致命傷になることはなかった。武彦が狙いを外したわけではない。武彦が刀を貫く少し前に、片瀬の体が動いた。片瀬自身の意思ではない。片瀬の体を誰かが担いでいた。いつからそこにいたのかは分からぬ。ただ、武彦の邪魔をしたのがその者であることは間違いない。

「わざわざ死にに来たのか？」

「部下を助けに来ただけだ。お前達と戦つつもりはない」

「そつちにはなくともこちらにはある」

「・待て・・武彦」

武彦を制止したのは昌吾であった。昌吾は田の前の男に見覚えがあった。ギルバート。それが男の名だ。教団の幹部の人でかなりの権限を持つ。教団に反抗する勢力を次々と潰しているとの噂もある。

「学院の包囲はすでに完了している。有利なのはこちらだぞ」「お前を殺せば戦況は変わる・・だろう?」

ギルバートが動く前に武彦の刀がギルバートの首につきつけられていた。ギルバートは舌打ちする。

「私を殺しても作戦は続く。この学院を完全に掌握するまでは」

「・・なるほど。だが、お前を生かしておく理由も無い」

「言つたはずだ、有利なのはこちらだと。学院の生徒を殺す事とて出来るのだ」

ギルバートが焦りながら言つ。武彦は冗談で刀をつきけているのではない。本気で殺すつもりだ。だが、ギルバートは最後の切り札を使つた。学院の生徒を人質にとつたのだ。

「君達の片方が我々に投降するのなら、生徒の命は保障する」

「・・武彦・・学院の事は任せた」

昌吾は投降すると言った。学院の生徒を守るためにだと。ギルバートは約束は必ず守ると言った。

「なら、全ての戦力を撤退させろ。今すぐにだ」

「分かつていいる」

学院を包囲していたファンタムの部隊はすぐに撤退を開始した。しかし、昌吾はギルバートに拘束され、どこかへと連れて行かれた。学院は守りきつたが、武彦は複雑な心境であった。だがギルバートが去る前に武彦はギルバートに告げた。

「いざれ借りは返す」

「・・楽しみにしておこう」

そして教団の騎士達もひきあげていった。だが、このギルバートの取った行動が武彦の逆鱗に触れてしまい、事態を最悪の方向へと進ませた事をまだ教団の幹部達は知らなかつた・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8628d/>

東京魔学院～運び込まれた伝説の宝～

2011年2月3日19時29分発行